

私たちの町の文化財

■第一話 花岡山とキリスト教

江戸時代も終わりに近い文政年間、花岡山の中腹で「加賀山隼人正興良息女墓」と刻まれた四角い石が発見されました。これは、江戸時代初め頃の1636年、禁教の時代にあってキリスト教の信仰を棄てず、そのため、夫・子供・奉公人14名とともに処刑された加賀山マリアの墓石でした。父、興良は高山右近の家臣だった人で、敬虔なキリシタンです。夫、小笠原玄也はガラシャ夫人を介錯した少斎の三男で、やはりキリシタン。筋金入りの信者であったといえます。藩主細川忠利は、その信仰が長崎奉行・幕府の知れるところとなったため、重臣・親族を通して棄教を勧めましたが、マリア一家が応じなかったため、止む無く処刑を行なったといえます。

現在、この墓にはマリアの殉教を悼み、その死後300年を経た昭和10年に手取教会が建てた石碑が立っています。碑の題字を書いたのは、あの徳富蘇峰。蘇峰もまた洋学校教師ジェーンズの教えを受けたキリシタンです。大河ドラマ「八重の桜」でもキリスト教を奉ずる青年同盟「熊本バンド」のメンバーとして登場していました。そして、その「熊本バンド」は明治8年、花岡山にて結成されています。

私たちにとって身近な花岡山。実は熊本におけるキリスト教の聖地ともいえるのです。
熊本市文化振興課 美濃口雅朗氏

毎年、結盟の日である一月二十日に、花岡山山頂の「奉教の碑」前で、まだほの暗い午前6時頃から早天祈祷会が開催されているモン

